ADRC Highlights

Asian Disaster Reduction Center Monthly News

Vol. 382
January
2025

トピックス

アジア防災センター 2025年頭のご挨拶

アジア防災センター長
三浦房紀

関係機関との協力推進

インドネシア気象庁研修の実施

お知らせ

¶　出版物「センチネルアジア10周年記念：アジア・太平洋における宇宙ベースの災害管理支援」

¶　阪神・淡路大震災から30年を迎えました

Asian Disaster Reduction Center
アジア防災センター

〒651－0073
神戸市中央区脇浜海岸通
1-5-2　東館5F

Tel: 078-262-5540
Fax: 078-262-5546
editor@adrc.asia
https://www.adrc.asia

© ADRC 2025

アジア防災センター 2025年頭のご挨拶

新年明けましておめでとうございます。

昨年11月ベトナムのハノイで開催された「アジア防災会議2024」で、前センター長濱田政則先生の後任としてセンター長に任命いただきました山口大学名誉教授三浦房紀です。専門は地震工学、防災工学です。濱田先生とも様々な面でご一緒させていただきました。

日本では、昨年は、正月には2024年能登半島地震が起き、そして１月２日には羽田空港での航空機事故が発生する衝撃的な幕開けでした。８月８日には日向灘で地震が起こり、初めて「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」が出され多くの人が戸惑いを感じました。一方、８月には台風10号は迷走し全国各地に大雨をもたらし、さらに９月には復興半ばの能登半島を豪雨が襲うなど、暴風災害も多発しました。

今年に入ってからは、記録的な寒波で日本海側、北日本に大雪が降り、対応に大変な状況が続いています。また、アメリカのカリフォルニアでは大火災が発生しています。まさに私たちは災害多発時代に生きている、ということを改めて実感します。

さて、今年は1995年兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）から30年です。神戸市はじめ全国で追悼の記念式典が行われました。30年前、折しもちょうど１月17日から大阪で開催予定の日米都市防災会議に日本側の幹事の一人として参加していた私は、大阪のホテルでその日の朝５時46分、激しい揺れで目が覚めました。翌日西宮を中心に被災地に入った私には、その景色が現実のものとは思えませんでした。倒壊した家、脱線した電車、空中高く宙ぶらりんになった新幹線の線路、等々、まるでパニック映画の世界にいるようでした。その光景は今でも忘れることはできません。

1998年設立されたアジア防災センターは、アジア地域での災害を軽減するために、わが国がこれまで様々な災害を克服する中で培ってきた防災に関するハード、ソフトの技術、情報を提供し、その移転の支援、これらを通じた地域コミュニティの防災力向上支援、人材育成支援などを主要ミッションとして活動を行っています。地震災害に加えて、気候変動による気象災害も世界各地で発生しています。その度に、特にアジアでは多くの人命が失われています。その意味で、アジア防災センターの役割と責任はますます重くなっています。

続き

センターのスタッフと一緒に、多くの関係者の皆様のご協力をいただきながら、センターの役割を果たしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

2025年１月
アジア防災センター長
三浦　房紀

●関係機関との協力推進

インドネシア気象庁研修の実施

インドネシアは日本と同様に地震が頻発しており、過去の地震発生においては多くの貴重な人命や財産が失われてきました。日本では全国的に地震早期警報システムが整備されていますが、インドネシアにおいては今後の課題となっています。

そこで、アジア防災センター（ADRC）はインドネシアにおいて災害情報を扱う主要機関の一つであるインドネシア気象庁（BMKG）からの依頼を受け、BMKG職員の能力向上を目的とした研修業務を実施しました。期間は2024年11月17日から12月14日に実施されました。BMKGの職員30名が参加し、日本の防災関係機関に訪問し講義や実習などが行われました。

研修では、東京大学、東北大学、京都大学などからは地震学や日本の早期警報システム、近年の研究事例などの講義を受講しました。内閣府や藤沢市においては、行政の防災の取り組みについて学びました。また、東日本大震災の被災地を視察し、同災害に関する震災遺構や博物館などを訪問しました。さらに、鉄道や地図、警報装置や通信を取り扱う民間企業からも、現在の最新の地震防災対策などについて講義を受けました。

研修員は日本における防災の取り組み、また主要テーマである地震早期警報システムの整備における最新の取り組みなどについて、学ぶことができました。この経験や知識が、今後のインドネシアにおける同システムの整備に寄与されることを期待しています。

（左）地震報知機器の説明の様子，（右）気象庁気象研究所 小寺博士の講義

●お知らせ

出版物「センチネルアジア10周年記念：アジア・太平洋における宇宙ベースの災害管理支援」

センチネル・アジア（SA）は、宇宙コミュニティ（宇宙機関）、災害管理コミュニティ（ADRCとそのメンバー機関、災害管理機関）、国際機関、学術機関（大学、研究機関、技術機関）間の連携の枠組みです。ADRCとそのメンバーを通じた災害管理コミュニティとの連携は、当初からSA

続き

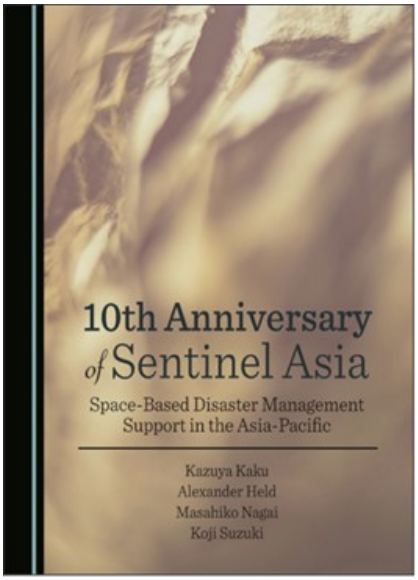
の主要ビジョンの一部でした。アジア・太平洋地域宇宙機関会議(APRSAF)の枠組みの下で、2004年に提案され、2005年に実施が合意され、2006年に実施と運用が開始され、現在も運用されています。

2024年11月、ケンブリッジ・スカラーズ・パブリッシングから「センチネル・アジア10周年記念：アジア・太平洋における宇宙ベースの災害管理支援」というタイトルの本が出版されました。これは、ADRCの客員研究員である加来一哉博士、ADRCのプロジェクト・ディレクターである鈴木弘二氏らによって執筆されました。

この本は、2004年の構想発足から10年間のSAの活動をまとめたもので、10周年を記念しています。この本では、SAの歴史、枠組み、実施方法、運営方法、成果を紹介しており、地域のパートナーが建設的に協力して衛星リモートセンシングを適用し、地域の災害管理を支援してきた優れたケーススタディを提供し、SAのさらなる発展に貢献するとともに、他の地域での災害対応に関する同様の国際協力の参考になるでしょう。

この本の印税は、災害管理活動に寄付されます。

詳細については、以下をご覧ください。



出版物「センチネル・アジア10周年記念：アジア・太平洋における宇宙ベースの災害管理支援」

ハードカバー：https://www.cambridgescholars.com/product/978-1-0364-1715-4

電子書籍：　https://play.google.com/store/books/details?id=W3QzEQAAQBAJ&rdid=book-W3QzEQAAQBAJ&rdot=1&source=gbs_vpt_read&pcampaignid=books_booksearch_viewport&pli=1

阪神・淡路大震災から30年を迎えました

今から30年前の1995年１月17日、神戸を中心とした阪神間の広いエリアがマグニチュード7.3の阪神・淡路大震災に襲われました。震源は地下16kmという、浅いところから大都市を直撃した大地震でした。6,434人の命を奪い、巨大な経済的損失を引き起こしました。

震災の経験を生かしたいという思いから、ADRCは、この阪神・淡路大震災の３年後の1998年に、兵庫県神戸市に設立されました。

震災から30年の節目として、2025年１月17日に発表したメッセージを以下のサイトからご覧いただけます。

https://www.adrc.asia/publications/Poster/GHAE1995_Message.pdf

（写真提供：神戸市）

問い合わせ・配信申し込み

このニュースレターに対するお問い合わせ、またEメールによる配信をご希望の方は
editor@adrc.asia までEメールをお寄せください。